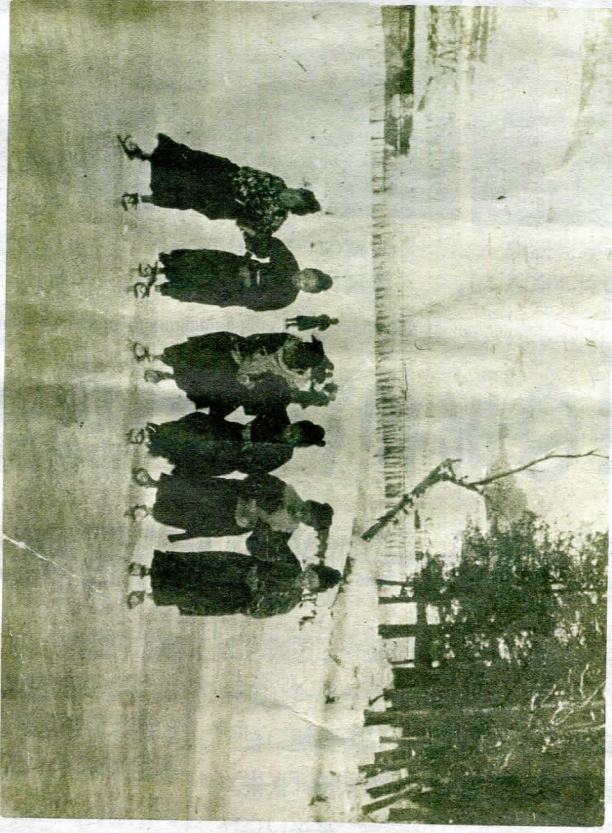


冬の娯楽 子どもたち夢中に



下諏訪町の秋宮スケートリンクで下駄スケートを楽しむ少女ら（1913（大正2）年1月（下諏訪町シタルパム下駄スケートをす少女たち「同博物館所蔵」）



「下駄スケート」国文化財登録へ

岡谷市出身の記者(37)も小学校の時はスケート学習で毎年数回滑っていた。取材を機に二十数年が経った。スケートスケートに憧れたが、当時のスケート靴は産のものでも1足2円50銭(現貨)の価値(約4万2000円)と高価だった。

冬季限定のリンク「ふれあひ広場秋宮スケートリンク」(こでは下駄スケートを借りることができる)ので、実際に滑ってみた。スタッフに教えてもらいながら、まず下駄を履き、ひもを下駄底や足首に回して固定。この時「もつぎつ」と何度も言われ、足が痛くなるほどぎゅぐゅ縛った。「とにかく転びだくな」と思いつつ滑り始めた。足と下駄が一体となり、転たよつ安心感があり、転倒せず滑ることができた。片足に体重を乗せながら前に進んでいく感覚が懐かしい。自転車に乗るようになってから覚えた感覚は何年たっても残っているようだ。

庶民でも手が届く

同博物館によると、明治時代、諏訪は冬の寒さが厳しく、諏訪湖をはじめ池や田んぼに厚い氷が張り、子どもたちは草履や下駄の裏に竹を取り付けて滑っていた。明治中期以降、下駄底に金属棒を取り付けた「氷滑り下駄」が登場。速さを競うことが流行り、氷滑りは諏訪の子どもたちの代表的な遊びとなった。

引き継がれる諏訪の文化

田んぼに厚い氷が張り、子どもたちは草履や下駄の裏に竹を取り付けて滑っていた。明治中期以降、下駄底に金属棒を取り付けた「氷滑り下駄」が登場。速さを競うことが流行り、氷滑りは諏訪の子どもたちの代表的な遊びとなった。氷滑りの流行を受け、1900(明治33)年に中洲小学校(諏訪市)が氷滑り下駄を購入し体育の授業に氷滑りを取り入れた。その後、諏訪湖周辺の学校でも次々と授業でスケートをできる下諏訪北小学校の児童ら今年1月11日、秋宮スケートリンク

文化財登録の新聞記事を見、冬に自分の下駄スケートを履いてみようという谷市の男性(81)がリンクにいた。小学生の時は諏訪湖や田んぼで滑っていたので文化財になるのうれしむと話し、履いてみて当時を思い出した。本日はスケート靴が欲しいかつたなあと思っていた。リンクには、今も授業でスケートを滑る町内の小学生や子ども連れで氷上遊びを楽しむ家族などが見られる。その姿を見て、下駄スケートが諏訪にもたらした影響を改めて感じ、後世に残すべき文化財だと思いを強くした。

文化財登録の新聞記事を見、冬に自分の下駄スケートを履いてみようという谷市の男性(81)がリンクにいた。小学生の時は諏訪湖や田んぼで滑っていたので文化財になるのうれしむと話し、履いてみて当時を思い出した。本日はスケート靴が欲しいかつたなあと思っていた。リンクには、今も授業でスケートを滑る町内の小学生や子ども連れで氷上遊びを楽しむ家族などが見られる。その姿を見て、下駄スケートが諏訪にもたらした影響を改めて感じ、後世に残すべき文化財だと思いを強くした。

05 (明治38)年に鉄道が開通すると、外国人を言わすスケート愛好家が諏訪湖を訪れてにぎわった。スケート靴を履き、洋服姿で履き滑る愛好家の姿に子どもたちが憧れたが、当時のスケート靴は産のものでも1足2円50銭(現貨)の価値(約4万2000円)と高価だった。

1月、地元(明治39)の学生が同町に飾り職人河西連之助に相談。連之助は「キョウゴケートの靴を参考に、熱した鉄を叩いて作ったアイディア(足の部分)と支脚を木駄底に取り付け、下駄スケートが生まれた。1足30銭(約3000円)で下駄スケートが販売されると、爆発的な人気に。諏訪一の鍛冶職人として、下駄スケートを作り、一足30銭(約3000円)に広まった。08(明治41)年の「第1回諏訪湖一周競争会」が全国紙に掲載されると、諏訪のスケートは全国的にも有名になった。

田んぼで諏訪湖や